# CCG と DTS による日本語の敬語表現の分析

渡辺 成美1

戸次 大介 1,2,3

- 1) お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 2) 国立情報学研究所
  - 3) 独立行政法人科学技術振興機構、 CREST

{watanabe.narumi, bekki}@is.ocha.ac.jp

# 1 背景

日本語の各敬語表現は、特定の対象に敬意を表す役割を持つ。敬語についての研究は数多く存在する。Harada[8] は敬語を一致現象 (agreement) として捉えるが、この方法は問題が指摘されている(戸次ら [1] など)。その問題を解決するもう一つの立場として、慣習的含み (conventional implicature) による定式化が考えられる (Potts and Kawahara[10]、McCready et al.[9] など)。

Potts and Kawahara [10] は敬語および卑罵語が expressive であるとし、その意味を多次元的に表す。expressive type  $\epsilon$  を用いて expressive content のための規則を示し、敬意の度合いを [-1,1] の間の実数値で表した。しかし意味合成に問題があり、完全ではない。戸次 [1] は高階動的論理により敬語を含む待遇表現の意味表示を与えているが、「お」「ご」などの接頭語や「になる」「する」などの活用語尾の分解までは示していない。渡辺・戸次 [5] は戸次 [2] に従い接頭語や活用語尾についての統語的な分析を示したが、意味論についての議論は深く行われていない。また McCready[9] は日本語に限らず多くの言語についての敬語の使用条件の一般化を与えるが、話者と聞き手との間の関係のみ扱われており、より詳細な分析は与えていない。

このように、敬語の使用に関して完全な分析はまだ与えられていない。よって本研究では、これらの問題を踏まえ、日本語の敬語表現のための網羅的な仕組みを提案する。文法記述の枠組みとして組み合わせ範疇文法 (Combinatory Categorial Grammar: CCG) (Steedman[11]、戸次[2])を用い、意味表示の枠組みとして、自然言語の証明論的意味論の一つである依存型意味論 (Dependent Type Semantics:DTS) (Bekki[6]、Bekki and McCready[7])を用いる。

# 2 敬語表現の種類

動詞と接続する主な敬語表現とその例として、以下 が挙げられる(文化審議会[3]、菊池[4]参照)。

- (1) 尊敬語 (上位:ガ格名詞句 下位:話者)
   れる、お/ごーになる
   お/ごーなさる、-なさる
   お/ごーだ、お/ごーでいらっしゃる
   お/ごーくださる、-てくださる など
- (2) 謙譲語 (上位:二・ヲ格名詞句 下位:ガ格名詞句、話者) お/ご-する、お/ご-いたす など
- (3) 丁重語 (上位:聞き手 下位:話者、ガ格名詞句) お/ご-いたす、いたす、 まいる、申す、存じる、おる、ござる など
- (4) 丁寧語 (上位:聞き手 下位:話者) です、ます など

以下に「ぉ/ご - なさる」「ぉ/ご - する」の例を示す。

- (5) 先生が鈴木をお待ちなさる。
- (6) 鈴木が先生をお待ちする。

尊敬語を含む (5) ではガ格の表す人物である「先生」に敬意が示され、話者を下位に置く。謙譲語を含む (6) はヲ格の表す人物である「先生」に敬意が示され、ガ格の表す人物である「鈴木」と話者を下位に置く。

- (7) 今日は良い天気です。
- (7) のように、丁寧語では話者の聞き手へのへりく だりのみが示される。

### 3 CCG

CCG は語彙化文法であり、組み合わせ規則と語彙項目からなる。以下はその規則の一例である。

$$> \frac{\alpha/\beta : f \quad \beta : a}{\alpha : fa}$$
  $< \frac{\beta : a \quad \alpha \setminus \beta : f}{\alpha : fa}$  (順/逆閏数適用規則)

また \$ 記法と呼ばれる略記法を用いる。X/\$ は  $X\setminus X/Y\setminus X/Y/Z\setminus X$ 、…、 $X\setminus \$$  は  $X\setminus Y\setminus X\setminus Y\setminus Z\setminus X$  . … と いった統語範疇を一般化して表したものである。 CCG の仕組みにより、動詞の語彙項目の中から敬意の対象を適切に特定することが可能となる。

### 4 DTS

 $\mathrm{DTS}[6]$  は依存型理論に基づく自然言語の証明論的意味論の一つである。ここで、 $\begin{bmatrix}x:A\\B\end{bmatrix}$  は  $A \times B$  を一般化したものである。

Bekki and McCready[7] は、DTS で意味論的前提 や慣習的含みを表すことのできる仕組みを提案している。A が慣習的含みであることを表すには、以下の CI 演算子を用いる  $^1$ 。

(8) 
$$\mathbf{CI}(@_i:A) \stackrel{def}{\equiv} \mathbf{eq}_A(@_i,@_i)$$

本研究では、この仕組みにより敬語表現が示す内容を慣習的含みとして計算することができると考える。

### 5 分析

### 5.1 接頭語「お」「ご」

接頭語「お」「ご」は敬語の複数の分類にまたがって使用されるが、どちらが接続されるのかは単語に依存する。

(9) a. お待ちする b.\*ご待ちする

そのために、「お」と接続する単語の語彙項目に+Oの素性を、「ご」ならば+GOの素性を与える。また、「お+和語連用形」「ご+漢語動詞語幹」などを表すためのSの活用形素性値としてhonを定義する。これにより敬語表現を適切に分類することができる $^2$ 。

$$egin{align*} rac{\$}{S_{hon} ackslash S/(S_{cont} ackslash S)} & rac{\$5}{S_{cont} ackslash NP_{ga} ackslash NP_o} \\ & : id & : \lambda y. \lambda x. \lambda c. \mathbf{Matu}(x,y) \\ & > & & \\ \hline S_{hon} ackslash NP_{ga} ackslash NP_o \\ & : \lambda y. \lambda x. \lambda c. \mathbf{Matu}(x,y) \end{array}$$

#### 5.2 尊敬語

尊敬語「(お・ご) - なさる」のための語彙項目として、以下を与える。

(10) なさ⊢

$$S \underset{stem}{v :: 5} :: \mathit{NAS} \ \backslash \mathit{NP}_{\mathit{ga}} \backslash \$ \backslash (S \underset{\mathsf{cont}}{\mathsf{v}} \ |\mathit{hon}| \ \underset{\mathsf{stem}}{\mathsf{v} :: \$} \ \backslash \mathit{NP}_{\mathit{ga}} \backslash \$)$$

$$: \lambda p.\lambda ec{y}.\lambda x.\lambda c. egin{bmatrix} pec{y}xc \ \mathbf{CI}(@_i:\mathbf{honor}(\mathtt{sp},x)) \end{bmatrix}$$

これにより「(連用形) + なさる」「(サ変語幹) + なさる」「お + (和語連用形) + なさる」「ご + (サ変語幹) + なさる」と、「(お・ご) - なさる」として考えられる各表現の導出が可能となる。図 1 は文 (5) の導出である。DTS の仕組みにより、尊敬語を含む文では話者がガ格の指す人物に敬意を示していることが honor(sp,x) として表される。ここで sp は話者を表す。

「お・ご - だ」「お・ご - +の +  $\langle$  名詞句 $\rangle$ 」「お・ご - になる」は、ダノ状詞 $^3$  の特殊なものと捉えることができる。「だ」「の」「にな(る)」に +hn の素性を与え、以下の規則により扱うことができるようになる。

$$S_{hon} \backslash NP_{ga} \backslash \$$$

$$: M$$

$$S_{n :: da|no} \backslash NP_{ga} \backslash \$$$

$$stem_{+hn}$$

$$: \lambda \vec{y}. \lambda x. \lambda c. \begin{bmatrix} M \vec{y}xc \\ \mathbf{CI}(\hat{\mathbf{Q}}_{i} : \mathbf{honor}(\mathbf{sp}, x)) \end{bmatrix}$$

(12) にな
$$\vdash S_{v :: 5} :: r \setminus S_{n :: da :: 1} : id$$

$$thn$$

 $<sup>^1{</sup>f eq}_A(M,N)$  は、型  ${f A}$  である項  ${f M,N}$  が等しいという命題の証明の型である。よって反射律により  ${f CI}(@_i:A)$  は常に真である。

 $<sup>^2</sup>cont$  は連用形を表す。また stem は語幹、term は終止形、attr は連体形をそれぞれ表す。

 $<sup>^3</sup>$ 「~だ」「~で」に接続し、「~の」が連体節をなす状詞のこと。 詳しくは 戸次 [2]、[2]、[2]、[2]、[2]、[2]、[2] を照。

図 1: 「鈴木が先生をお待ちなさる」の導出

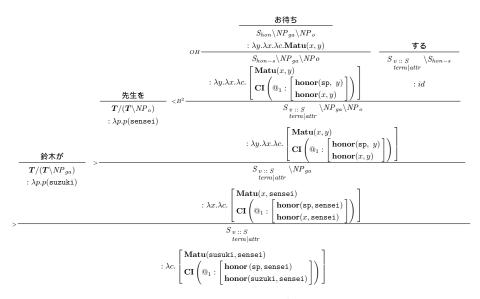


図 2: 「鈴木が先生をお待ちする」の導出

表待ち 
$$S_{hon} \backslash NP_{ga} \backslash NP_{o}$$
 
$$: \lambda y. \lambda x. \lambda c. \mathbf{Matu}(x,y)$$
 になる 
$$S_{n::da|no} \backslash NP_{ga} \backslash NP_{o}$$
 
$$S_{v::5::r} \backslash S_{n::da::1}$$
 
$$\vdots \lambda y. \lambda x. \lambda c. \left[ \mathbf{Matu}(x,y) \right]$$
 
$$: id$$
 
$$< B \frac{S_{hon} \backslash NP_{ga} \backslash NP_{o}}{S_{hon} \backslash NP_{ga} \backslash NP_{o}}$$
 
$$: \lambda y. \lambda x. \lambda c. \left[ \mathbf{Matu}(x,y) \right]$$
 
$$: \lambda y. \lambda x. \lambda c. \left[ \mathbf{Matu}(x,y) \right]$$
 
$$: \lambda y. \lambda x. \lambda c. \left[ \mathbf{Matu}(x,y) \right]$$
 
$$: \lambda y. \lambda x. \lambda c. \left[ \mathbf{Matu}(x,y) \right]$$
 
$$\mathbf{CI}(@_{i}: \mathbf{honor}(\mathbf{sp},x)) \right]$$

#### 5.2.3 否定

以下のように、否定文であっても敬意は否定されない。

(13) 先生が鈴木をお待ちなさらない。

ここで DTS と@の仕組みにより、否定は  $CI(@_1: honor(sp, sensei))$  の型チェックに影響を与えないため、適切に表される (Bekki and McCready[7])。

#### 5.3 謙譲語

謙譲語「お・ご – する」はサ変動詞のように活用する。これを扱うために、以下の規則を導入する。

$$S_{hon} \backslash NP_{ga} \backslash \$$$

$$: M$$

$$S_{hon-s} \backslash NP_{ga} \backslash \$$$

$$: \lambda \vec{y}. \lambda x. \lambda c. \begin{bmatrix} M \vec{y} x c \\ \mathbf{CI} \left( @_i : \begin{bmatrix} \mathbf{honor}(\mathbf{sp}, \ y) \\ \mathbf{honor}(x, y) \end{bmatrix} \right) \end{bmatrix}$$
( ただし  $y \in \vec{y}$  )

hon-s はこの表現の活用語尾と接続するための素性であり、活用語尾はサ変動詞と同じ様に活用する $^4$ 。

(15) 
$$\bigcup \vdash S_{v :: S} \underset{neg|cont|euph :: t}{\setminus NP_{ga} \setminus \$ \setminus (S_{hon-s} \setminus NP_{ga} \setminus \$)}$$

<sup>4</sup>尊敬語として「(サ変動詞語幹)+なさる」という表現が存在するため、「お・ご – する」の語幹部分を単純にサ変として扱うことはできない。

$$: id$$
 するト $S_{v :: S} \setminus NP_{ga} \setminus (S_{hon-s} \setminus NP_{ga} \setminus \$)$  
$$: id$$
 ...

図 2 は文 (6) の導出である。謙譲語を含む文では、 ガ格の指す人物と話者が二ヲ格の指す人物に敬意を表 すことが、 $\mathbf{honor}(\mathbf{sp},y)$  と  $\mathbf{honor}(x,y)$  として表され る。このように、尊敬語と謙譲語の敬意の対象の差を 適切に示すことができる。

## 5.4 丁重語・丁寧語

丁重語「- いたす」は、辞書項目を以下のようにすることにより敬意の対象を示すことができる。ただしhrr は聞き手を表す。

$$: \lambda p.\lambda \vec{y}.\lambda x.\lambda c. \left[ \begin{matrix} p\vec{y}xc \\ \mathbf{CI} \left(@_i : \begin{bmatrix} \mathbf{honor}(\mathtt{sp},\mathtt{hrr}) \\ \mathbf{honor}(x,\mathtt{hrr}) \end{bmatrix} \right) \right]$$

丁寧語「一です」は以下のようになる。

$$\begin{array}{c} (17) \quad \mathbf{\mathfrak{C}}\mathbf{\mathfrak{f}} \vdash \\ S \underbrace{\begin{array}{c} 1 \\ term \\ +p \end{array}} & \stackrel{N ::: da}{stem} :: \underbrace{1} \\ : \lambda p. \lambda c. \begin{bmatrix} pc \\ \mathbf{CI}(@_i : \mathbf{honor}(\mathsf{sp},\mathsf{hrr})) \end{bmatrix} \end{array}$$

# 6 まとめと今後の課題

CCG と DTS を用いて、尊敬語・謙譲語・丁重語・丁寧語を含む日本語の敬語表現の統語論・意味論についての手法を示した。

今後の課題として、敬語の命令形についての分析が 挙げられる。「お待ちなさい」などの敬語の命令形は 敬意を含んでいないと考えられる一方で、「おくれ」の ように命令形でのみ許容される表現も存在する。

(18) \*おくれになる。 ok. おくれ。

また、会話が進むにつれて話者の態度(敬語の使用/不使用)が変わることもありえる。これは speech time と関係があると考えられる。このような現象について、更なる分析が必要である。

# 参考文献

- [1] 戸次大介, 川添愛, 片岡喜代子, 齊藤学: 「敬語の 意味論」, 言語処理学会第 14 回年次大会発表論 文集, pp.681-684, 東京大学 (2008).
- [2] 戸次大介:「日本語文法の形式理論」, くろしお出版 (2010).
- [3] 文化審議会:敬語の指針(答申), (http://www.bunka.go.jp/kokugo\_nihongo/ bunkasingi/pdf/keigo\_tousin.pdf)
- [4] 菊地康人:「敬語」, 光文社学術文庫 (1997).
- [5] 渡辺成美, 戸次大介:「組み合わせ範疇文法 (CCG) による 日本語の敬語表現の分析に向けて」, 言語 処理学会第 20 回年次大会発表論文集, pp.472-475 (2013).
- [6] Bekki, Daisuke. (2014). Representing Anaphora with Dependent Types. In Logical Aspects of Computational Linguistics (8th international conference, LACL2014, Toulouse, France, June 2014 Proceedings), N.Asher and S.Soloviev (Eds), LNCS 8535, pp.14-29, Springer, Heiderburg.
- [7] Bekki, Daisuke, and McCready, Eric. (2014). CI via DTS. In Proceedings of the Eleventh International Workshop on Logic and Engineering of Natural Language Semantics (LENLS11), pp.110-123, JSAI International Symposia on AI 2014, Tokyo, Japan.
- [8] Harada, S.-I. (1976). Honorifics. In: M. Shibatani (ed.): Syntax and Semantics 5, Vol. 499-561. New York: Academic Press.
- [9] McCready, E. (2014). Honorific Denotations. Engineering of Natural Language Semantics (LENLS11), pp.170-183, JSAI International Symposia on AI 2014, Tokyo, Japan.
- [10] Potts, C. and S. Kawahara, (2004) Japanese honorifics as emotive definite descriptions, In Proceedings of SALT XIV, pp.235-254.
- [11] Steedman, M.J.: Surface Structure and Interpretation, The MIT Press (1996).